

荒海の槍騎兵3

中部太平洋急襲

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

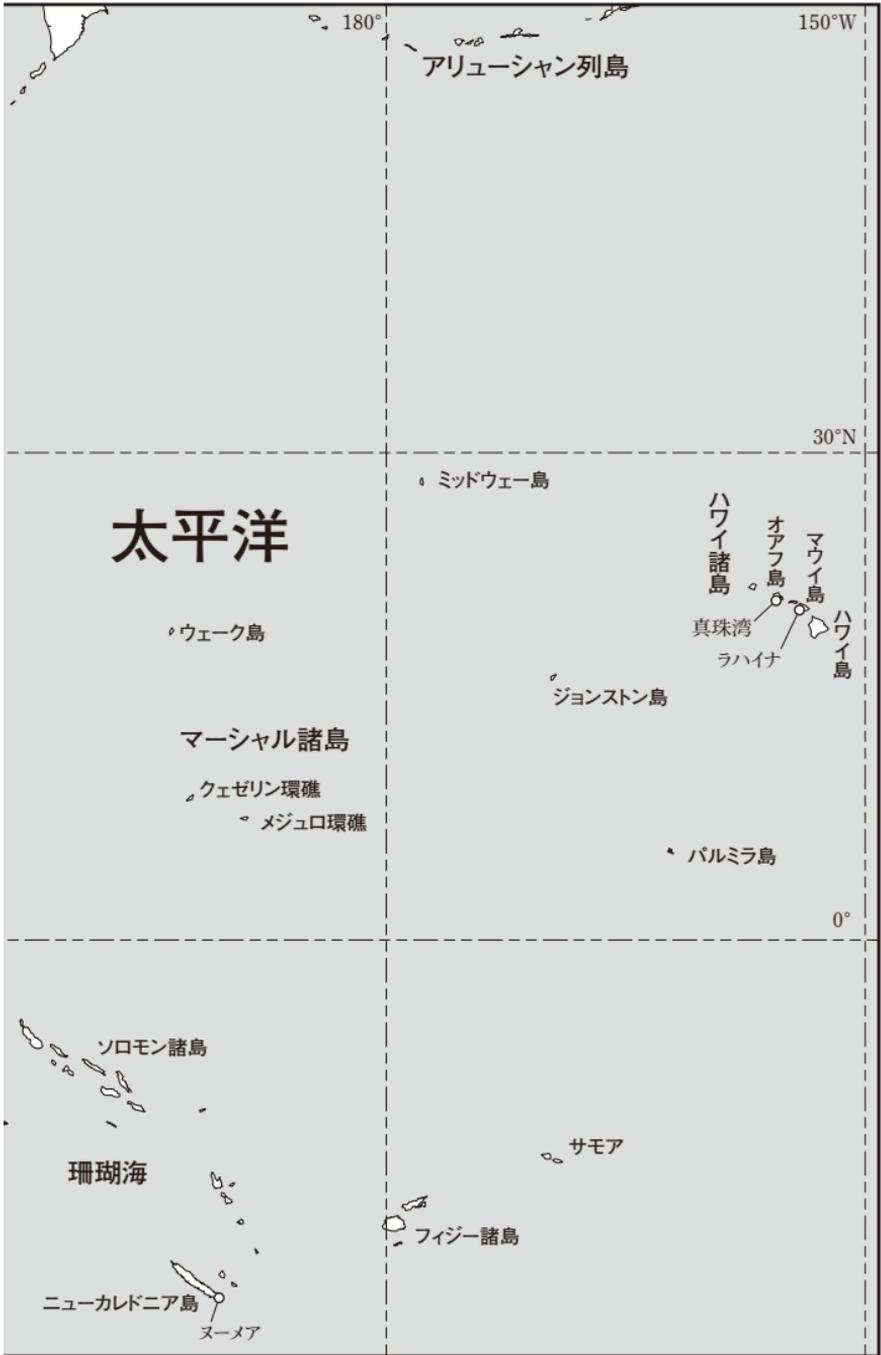
ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

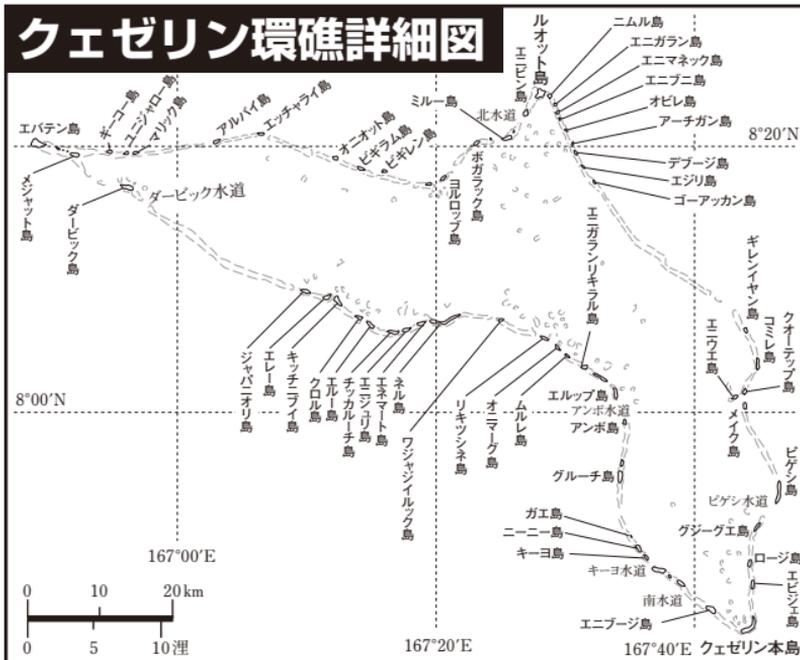
第一章	不 ^ふ 敗 ^{はい} 態 ^{たい} 勢 ^{せい}	9
第二章	屈辱の星条旗	29
第三章	狙われた島	49
第四章	海空戦航路	97
第五章	俊足の襲撃者	151
第六章	横 ^{よこ} 須 ^す 賀 ^か に来たもの	211



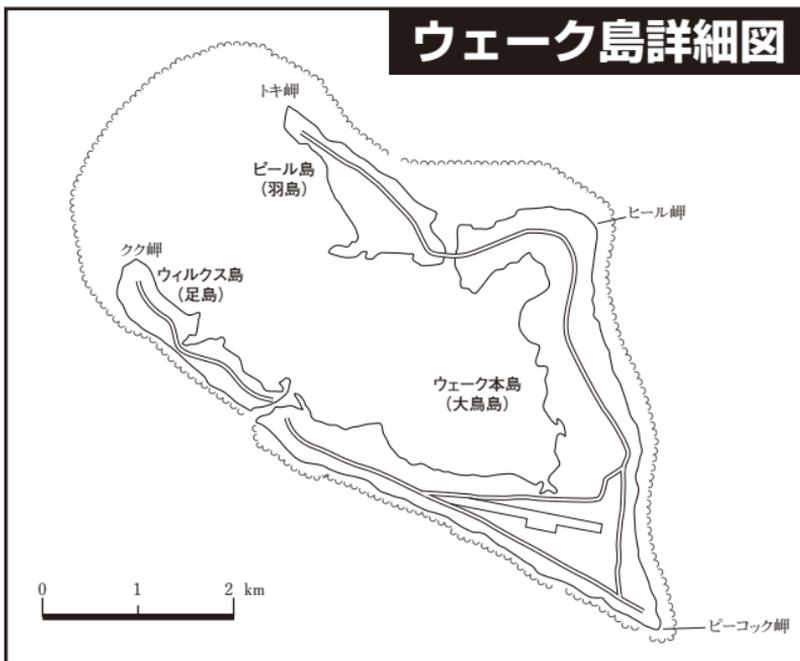
西太平洋要図



クゼリン環礁詳細図



ウェーク島詳細図





荒海の槍騎兵 中部太平洋急襲

3

第一章

不敗態勢ふはい

1

真珠湾は、閑散としていた。

三ヶ月前、軍港内で威容を誇っていた主力艦群は、どこにも見当たらない。

一〇隻を数えた新旧の戦艦群も、「世界最大の空母」として知られたレキシントン級の航空母艦も、レキシントン級よりもやや小振りながら、洗練された外観を持っていた「エンタープライズ」も、姿を消している。

降り注ぐ陽光は、港内に残留した艦艇や港湾施設を照らしているが、太平洋艦隊の主力艦艇がいなくなつた今は、かえつて寂寥感を際立たせているように感じられた。

太平洋艦隊の残存艦艇は、細い水路を通過して、港内に入ってゆく。

帰還した艦にも、被弾の跡が目立つ。

主砲塔一基を爆破され、鉄屑の堆積場のような有様にされている艦や、丈高い三脚檣を失い、艦容が大きく様変わりしている艦、舷側に複数の破孔を穿たれている艦がある。

合衆国領フィリピンを死守しようとして果たせなかつた太平洋艦隊の残存部隊は、「浮かぶ敗残兵の集団」とでも呼ぶべき惨めな姿を、陽光の下にさらしていた。

「空母がいるぞ！」

駆逐艦「モフェット」の上甲板で、真珠湾の様子を眺めていたマーチン・ベルナップ大尉の耳に、誰かの叫び声が飛び込んだ。

ベルナップは顔を上げ、港内を見渡した。

フォード島の南東岸——開戦前は、戦艦群の定位置だつた場所に、三隻の空母が並んでいる。

二隻は、艦形、大きさとも、南シナ海で沈んだ「エンタープライズ」と同じだ。

「エンタープライズ」と同じヨークタウン級に属す

る「ヨークタウン」と「ホーネット」であろう。

最後尾に位置する艦は、「エンタープライズ」と似ているが、サイズがやや小さい。

軍縮条約の余剰枠で建造された中型空母の「ワズプ」だと思われた。

「大西洋から回航して来たんですかね？」

「太平洋艦隊の空母は、ゼロになっちゃまったから南シナ海で負けたおかげで」

「サラトガ」爆撃機隊でペアを組んでいたジェシー・オーエンス中尉の問いに、ベルナップは答えた。

開戦時、太平洋艦隊に配属されていた「レキシントン」「サラトガ」「エンタープライズ」は、昨年二月一日の南シナ海海戦（公称は日米共通）と二月一八日のサン・フェルナンド沖海戦（ルソン島沖海戦の米側公称）で失われた。

太平洋艦隊は、一時的に空母が一隻もない状態に置かれたのだ。

本国の作戦本部は事態を重大視し、大西洋艦隊

の指揮下にあった空母四隻のうち、三隻を太平洋艦隊に回したのだろう。

「あの三隻のどれでも構わんから、乗せてくれんものかな」

ベルナップは呟いた。

V B 3の小隊長として日本軍の空母を攻撃したときのこととは、死ぬまで忘れない。

襲って来る零戦。防空艦から浴びせられた地吹雪のような対空砲火。次々と撃墜されてゆくV B 3の僚機。

ベルナップだけではなく、V B 3の全員と「レキシントン」「エンタープライズ」の爆撃機クルーが体験したものだ。

何度も死ぬような目に遭い、戦友を数多く失った。にも関わらず、敵の空母には手傷を負わせただけに、撃沈に追い込むことはできなかった。

この悔しさは、忘れられるものではない。復讐の手段はただ一つ、今一度日本軍の機動部

隊と対決し、今度こそ空母を葬り去ることだ。

そのためにも、新たに太平洋艦隊に配属された三隻の空母に配属を希望したい。

「配属される可能性はあるだろう」

ベルナップの声が聞こえたのか、「サラトガ」の飛行長を務めていたドナルド・ウォーレス中佐が言った。

「あの三隻の航空隊には、実戦経験がない。日本軍と戦った経験を持つ者は、どの艦でも歓迎されるはずだ」

「無論、希望しますよ。小隊長でなくとも、一パイロットとしてでも構いません」

日本軍の空母や防空艦の姿を思い浮かべると、すぐにでも出撃したい衝動に駆られる。

特に、空母に寄り添っていた防空艦は戦友や部下の仇であり、宿敵なのだ。

ウォーレスは、三隻の空母を眺めながら言った。

「新任の太平洋艦隊司令長官は、積極的に打って出

るより、守りを固めてジャップを迎え撃つ策を採るだろう。復讐戦の機会は来ると思うが、その時期はジャップの出方次第だ」

太平洋艦隊隷下の各戦隊司令官は、全艦が真珠湾に入港してから一時間後、太平洋艦隊司令部の長官公室に入室した。

第二任務部隊司令官ウィリアム・ハルゼー少将、第一四任務部隊司令官フランク・フレッチャー少将、第九巡洋艦戦隊司令官フェアアックス・リアリー少将といった面々だ。

戦隊司令官の中には、南シナ海で戦死した者や、重傷を負ってマニラの海軍病院に入院した者もいる。

マニラは既に無防備都市を宣言し、日本軍の占領下に落ちているから、同地に残された負傷者は、戦争が終わるまで帰還できない。

太平洋艦隊のフィリピン遠征が、艦や航空機のみ

ならず、人材面でも大きな損失を招いたことを、未帰還者の数が物語っていた。

「面識のある者もいるが、あらためて挨拶しておこう。キンメル提督（ハズバンド・E・キンメル大将。前太平洋艦隊司令長官）の後任として、太平洋艦隊の司令長官に任ぜられたチェスター・ニミッツだ。前職は、航海局長を務めていた。よろしく頼む」

全員が整列したところで、チェスター・ニミッツ大将はテキサス訛りの英語で挨拶し、一人一人に握手を求めた。

「私たちは敗軍の将です。戦訓分析にはできる限り協力しますが、いかなる処分を受けても致し方ないと考えております」

三人を代表して、フレッチャーが言った。
ニミッツは、ゆつくりとかぶりを振った。

「諸官に、責任を問うつもりはない。キンメル提督もパイ提督（ウィリアム・パイ中將。前太平洋艦隊次席指揮官）も、既に戦死している。他に、責任を負

うべき立場にある者がいるとは、私は考えていない。海軍長官も、作戦本部長も、私と同意見だ」

「では、現職からの更迭はないと？」

喜色を浮かべたのはハルゼーだ。

入室したときは、思い詰めたような表情を浮かべていたが、一瞬で生気が戻ったようだ。

「諸官には、今後も前線で指揮を執って欲しいと願っている。今回の敗戦の経験を、次回以降の戦いで活かして欲しい、と」

海軍省にも、作戦本部にも、

「各戦隊指揮官の責任を、厳しく追及すべきだ」との声はあった。

特に、南シナ海海戦で航空戦の指揮を執ったハルゼーとフレッチャーの責任は免れない。

巡洋艦部隊の指揮を執っていたリアリーにしても、戦艦部隊への援護が不十分だったという問題がある。

彼らに責任を取らせるべきだ、と主張する者は、

少ない数ではなかった。

ニミッツはそれらの声に対し、

「ハルゼー、フレッチャー、リアリーらに、敗北の責任がないとは言えないが、彼らは日本軍との戦闘を経験した指揮官だ。今後の戦争では、彼らの知見が不可欠となる。彼らを更迭しろとの主張に与することはできない」

と反論した。

人事権を握る海軍長官のフランク・ノックス大将に対しては、

「三提督を更迭するのであれば、私は太平洋艦隊司令長官への就任を辞退する」

とまで主張し、ハルゼーらを庇った。

結果、海軍省と作戦本部から「ハルゼーらの責任は問わぬ」との確約を取り付けたのだ。

だがニミッツは、そのことは敢えて三人に言わなかった。

「恩情に、感謝いたします」

「恩情ではない。適材適所を考えた結果だ」

頭を下げたフレッチャーに、ニミッツはかぶりを振った。

「フォード島に係留されている三隻の空母は、是非私に指揮を執らせていただきたい。南シナ海では不覚を取りましたが、次こそはジャップの機動部隊を葬り去って御覧にいきます」

ハルゼーが、身を乗り出して言った。

ニミッツが許せば、そのまま空母に乗り組み、出撃しそうな勢いだった。

「焦るな」

苦笑しながら、ニミッツはたしなめた。

「諸官は——いや、太平洋艦隊の将兵は、遠征から戻ったばかりだ。私は、諸官も含めて、全員に休暇を与えるつもりだ。しかる後に、敗因の戦訓分析を行い、太平洋艦隊の再編成を実施する。心身を休めることも、任務の内と心得て貰いたい」

ハルゼーは幾分か不満そうな表情を浮かべ、フレ

ツチャーとリアリーは安堵したような息を漏らした。

三亜港沖海戦（海南島沖海戦の米側公称）、南シナ海海戦、サン・フェルナンド沖海戦を続けざまに戦った後、フィリピンから離脱し、日本軍の哨戒圏を大きく迂回してハワイに帰還したのだ。

真珠湾に入港するまで、気が休まる暇がなかったであろうことは想像に難くない。

「休暇を取れ」というニミッツの命令は、何よりもありがたかったであろう。

「休暇を取る前に、一つだけ教えていただきたい。

太平洋艦隊に新たに配属された艦は、フォード島に係留されている三隻の空母だけですか？」

フレッチャーの問いに、ニミッツは答えた。

「詳細は太平洋艦隊の再編成時に話すつもりですが、空母三隻の他に、新鋭戦艦の『サウスダコタ』と、旧式戦艦の中から四隻を回して貰った。駆逐艦も、新鋭艦を優先して太平洋艦隊に回して貰うよう、作戦本部に話をつけてある」

ハルゼーが口笛を吹き鳴らした。

「そいつは豪勢だ。ですが、新鋭艦を太平洋艦隊が全て持って行ってしまうと、大西洋艦隊やイギリスから苦情が来そうですね」

「大西洋での主敵はUボートだ。潜水艦と戦うのに、戦艦や巡洋艦は必要ない。空母も対潜戦闘では有用だが、優先順位は太平洋の方が高い。イタリア海軍には、有力な水上砲戦部隊があるが、イギリス海軍だけで対処が可能だ」

「我々は、太平洋での戦いを第一に考えればよいということですか？」

「その通りだ。来年以降は、新鋭艦が続々と就役して来るが、それまでは現有兵力で戦線を支えなければならぬ。作戦本部は、空母、戦艦、巡洋艦の配属は太平洋艦隊を優先するとの方針を既に定めている」

「スターク提督（ハロルド・スターク大将。開戦時の海軍作戦本部長）が、そう言われたのですか？」

「いや、新たな作戦本部長となったアーネスト・キング提督のお考えだ」

2

シンガポールのセレーター軍港は、戦闘の名残を留めていた。

艇体の大部分を水面下に沈めている哨戒艇や、転覆したまま放置されている小艇、爆撃によつて上部構造物を破壊された輸送船等が散見される。

港内の海面には、ところどころ、艦船から漏れ出した重油が浮かんでいる。

「流石は、英国東洋艦隊の拠点ですな。泊地面積は充分だし、施設も充実している」

第六戦隊首席参謀貴島掬徳中佐は、旗艦「衣笠」の艦橋で港内を見回しながら言った。

貴島が言った通り、港内は広々としている。

トラック、クエゼリンといった、太平洋上の環

礁ほどの広さはないが、二個艦隊程度は楽に収容できそうだ。

南遣艦隊の各艦は、旗艦「香椎」に先導される形で、セレーターの奥にゆつくりと進んでゆく。

「衣笠」は「香椎」の後方に位置し、その後ろに第六戦隊の僚艦「古鷹」、第一九、二〇駆逐隊の吹雪型駆逐艦五隻という順だ。

他の南遣艦隊所属艦は、ジャワ島の近海で、オランダ領東インドの攻略戦に従事している。

先頭をゆく「香椎」は、少尉候補生の訓練を主目的に設計・建造された艦だが、通信設備は新鋭艦に劣らず、艦隊の旗艦に最適との評価を受けていた。

「プリンス・オブ・ウェールズ」も、ここに一旦入泊した後、南シナ海に出撃して来たのか」

第六戦隊砲術参謀桃園幹夫少佐は、海南島沖海戦で砲火を交えた英国海軍の最新鋭戦艦を思い出している。

同海戦の終了後、南方部隊の残存艦船は「プリン

ス・オブ・ウェールズ」に追撃され、旗艦「鳥海」がもう少しで沈められそうになった。

最終的には、「プリンス・オブ・ウェールズ」は機動部隊の艦上機に撃沈され、セレターに帰還することなく果てたが。

「艦船の数が少ないですね」

桃園は、気づいたことを口にした。

セレターに残っている艦船は一〇隻程度だ。

大・中型船は見当たらず、泊地警備を主目的としているであろう小型艇が大部分を占めている。

「シンガポール陥落前に逃げ出したのだろう。乗せられる限りの市民を乗せて。軍港内に逼塞してれば、空襲で撃沈されるか、シンガポール陥落時に鹵獲されるか、だからな」

司令官五藤存知少将の言葉に、貴島が頷いた。

「旅順港のロシア艦隊と同じですな。もつとも英国艦隊には、マラッカ海峡からインド洋方面に逃げ出すという選択肢がありましたか」

今日は昭和一七年三月八日。

シンガポールの英国極東陸軍が降伏してから、六日が経過している。

シンガポール攻略を担当する第二五軍は、昨年二月八日、開戦当日に英領マレー半島のコタバルに上陸し、シンガポールを指して南下を開始する予定だった。

ところが、米太平洋艦隊主力のフィリピン回航と南シナ海における決戦という予期せざる戦いが生じた結果、予定は大幅に遅れ、第二五軍のコタバル上陸は一月二二日となった。

計画よりも、二週間の遅れだ。マレー半島の英軍が、その間に防御態勢を強化していることは容易に想像がつく。

第二五軍は相当な苦戦が予想され、同軍の護衛を担当する南遣艦隊も艦砲による支援が可能なよう、マレー半島の東岸沖に展開した。

ところが、英軍の抵抗は予想よりも遙かに弱々し

く、各拠点では、投降する部隊が相次いだ。

第二五軍は、フランス、ベルギー、オランダに進攻したドイツの装甲部隊もかくやと思わせる速度でマレー半島を南下し、二月一七日には、シンガポール島を望むジョホールバルに到達した。

シンガポール島にこもった英極東陸軍は、籠城戦の姿勢を見せていたが、第二五軍が島に上陸し、シンガポール市街地に迫ったところで降伏した。

第二五軍から南遣艦隊司令部に派遣された連絡将校の話では、英軍将兵の戦意が著しく低下していたとのことだ。

セレターの英海軍基地が無線を傍受していたこと、巡洋戦艦「リパルス」が大きな損害を受けた姿で帰還したことから、米太平洋艦隊と英東洋艦隊敗北の情報が伝わったのだ。

南シナ海における連合艦隊の敗北が、英国極東陸軍の将兵から、抵抗する気力を奪ったのだった。

「『シンガポール』ノ英軍ハ降伏セリ」

との報告を、第二五軍司令部から受け取った南遣艦隊は、占領後間もないセレター軍港に向かい、今日、初めて英国東洋艦隊の拠点に入港した。

シンガポールは香港と共に、英国が極東に保有する植民地の中心となる地であり、英国の極東支配の象徴だ。

南方資源地帯の各拠点の中でも、最も攻略が困難と考えられていた場所なのだ。

そのシンガポールを陥落させた意義は大きい。

「港湾施設は、あまり損なわれていませんね」

桃園は、在泊艦船から地上に視線を転じた。

艦船の被害に比べ、地上施設の被害は小さい。

被弾の跡が目立つ建造物が何棟かあるものの、完全崩壊に至ったものはない。

セレターを攻撃した基地航空隊は、もっぱら在泊艦船に的を絞り、地上建造物にはほとんど手を出さなかつたようだ。

「小沢長官（小沢治三郎中将。南遣艦隊司令長官）が、

基地航空隊に指示を出されたそうだと。セレーター攻撃の際には在泊艦船に的を絞れ、と。施設を壊してしまふと、後で我が軍が使えなくなる」

五藤が、桃園の疑問に応えた。

「長官らしい深謀遠慮ですね」

「我が海軍も、ドックの数が充分とは言えぬからな。セレーターで艦艇を新規に建造するのは無理としても、艦艇の整備や損傷艦の修理には使えるはずだ」

「開戦以来、損傷艦が多数出ましたからな」

貴島が、いかにも同感、と言わんばかりに頷いた。事実、連合艦隊の艦艇に被弾・損傷した艦は多い。

南シナ海における米英連合艦隊との戦闘では、連合艦隊旗艦「長門」と姉妹艦「陸奥」、戦艦「山城」、空母「飛龍」「翔鶴」が大きな損傷を受けている。

第六戦隊に所属する「青葉」「加古」も修理のため、内地に後送された。

連合艦隊との決戦に勝利を収め、南方作戦に取りかかってからも、被弾・損傷する艦は相次いだ。

内地では、修理の順番待ちをしている艦があるほどだ。

セレーターのドックが使用できるようになれば、損傷艦の修理もはかどるはずだ。

「入渠している艦がいるようです」

桃園は、近づいて来るドックを指して言った。複数あるドックのうち、最も大きいものが、外扉を閉ざしている。

巨大な鉄製の扉の向こう側に、軍艦の上部構造物が見える。

巨大な三脚檣のようだ。

帝国海軍の軍艦では、大正年間に建造された五五〇〇トン型軽巡が三脚檣を採用しているが、入渠している艦の三脚檣は、軽巡のものよりもずっと大きく、形状も異なっている。

「あれは『リパルス』だよ」

「あの『リパルス』ですか？」
こともなげな五藤の答えに、貴島が目を剥いた。

「衣笠」の操艦に当たっていた艦長沢正雄大佐も、驚いたような顔を五藤に向けた。

開戦三日目の夜に、海南島の南東岸沖で渡り合った相手だ。

海南島沖海戦の終了後、南方部隊を追撃して来た英国東洋艦隊の戦艦は「プリンス・オブ・ウェールズ」一隻だけだったから、「リパルス」は損害を受け、セレターに帰還したのだらうと考えられていた。

同艦はその後、姿を現さなかつたところから、英本国に後送されたものと考えられていたのだ。

その「リパルス」が、未だにシンガポールに留まっていたとは、信じ難いところだった。

「先に『香椎』で作戦会議が開かれたとき、小沢長官から、話をうかがった」

五藤はそう前置きして、説明した。

——仏印（フランス領インドシナ）の第二二航空戦隊がシンガポールの英軍飛行場を爆撃したとき、一機がセレターのドックに入渠している大型艦を撮影

した。

二二航戦司令部が写真を精細に調べたところ、艦の形状や主砲配置から、「リパルス」であることが判明した。

報告を受け取った小沢長官は、「二二航戦に『リパルス』は攻撃しないように」と命じると共に、第二五軍司令部にも、「シンガポール占領後、セレター軍港の在泊艦船、特にドック内の英巡戦『リパルス』を速やかに接収して欲しい」と要請した。

結果、「リパルス」はドック内で無抵抗のまま鹵獲された、ということだった。

「最大の脅威と目していた敵艦の一隻を鹵獲したとなれば、素晴らしい快挙です」

貴島が、弾んだ声で言った。

英国東洋艦隊に配備された二隻の巨艦については、第六戦隊の第一小隊が南方部隊に配属されたときに聞かされている。

当時の第二艦隊司令長官近藤信竹中将は、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。